柿衞文庫蔵『寛永花壇千句』の翻刻と解説

松本麻子

【解説】

『寛永花壇千句』は、寛永二年（一六二五）三月二四日～二六日に興行された千句連歌である。「花壇」は現在の宮城県仙台市青葉区にある地名。仙台藩主伊達政宗（一五六七～一六三六）と子で後の二代藩主忠宗（一六〇〇～一六五八）が第一・第十百韻にそれぞれ発句・脇を詠む。連衆は、伊達政宗・忠宗の他、玄信・綱元・元頼・兼与・似春・兼益・立徳・定治・松恵・氏伴・景軌・玄純。元勝・重資・重延・重次の四名は執筆でそれぞれ一句のみの入集。猪苗代兼与（一五八四～一六三二）は、兼如の子で連歌師。近衛信尹より古今伝授を受けた。伊達政宗に仕え仙台にて和歌や連歌の指導を行った。兼益は兼与の甥、兼与の弟正益の子。伊達家に仕えた。生没年未詳。兼益と行動を共にすることが多かったとの指摘が綿抜豊昭（『近世前期猪苗代家の研究』新典社、一九九八年）にある。伊達家が正月に行っていた七種連歌会には、伊達家の重臣である元頼（大町）・綱元（茂庭）・玄信（遠藤）や、松恵（成田）・定治（松坂）・似春（小野）らが度々同座しており、本稿の『花壇千句』と連衆が一致する。

古典文庫『伊達政宗公集』（綿抜豊昭・岡本聡編、一九九八年）寛永二年三月の項に『寛永花壇千句』の第一～追加までの一巡が残されている。千句すべてを書写した写本は現在、柿衞文庫の一本のみ伝わるため、ここに全文を翻刻した。なお、翻刻に際し、仮名遣いと踊り字は底本のママに、旧字は新字に改め、丁の変わり目は」で示した。

【書誌】

『寛永花壇千句』。柿衞文庫。番号、書一七九四れ四一。写本一冊。外題に「寛永花壇千句」。表見返しに「仙台伊達家旧蔵品」の貼り紙。内題ナシ。表紙は、縹色無地。本文楮紙。寸法、縦一八・八糎×横二八・六糎。本文、墨付四一丁、一面一五行書、一句一行。遊紙、前後ともにナシ。奥書ナシ。

【翻刻】

寛永弐年三月廿四日

千句

何船　第一

1 かつさくも梅のかほりや四方の春　政宗
2 ふきかふ風の長閑なる空　忠宗
3 ほのかすむ高根に雁の声きゝて　玄信
4 なかき日もやゝくれて行かけ　綱元
5 若草の露にや月のうつるらむ　元頼
6 しつかに雨のはるゝ野の末　兼与
7 沢水のおちそふまゝに音たてゝ　似春
8 ほりものこさぬ田面はるけし　兼益
9 村竹（ウ）の陰にも里やこもるらむ　立徳
10 しける柳を分てゆくみち　定治
11 猶すゝむところもとめむたもとにて　松恵
12 又谷ふかき山そへたゝる　氏伴
13 初雪のきえぬるうへにふりつもり　景軌
14 しはしはかりの朝しものいろ　玄純
15 冬野にも日のさすかたは虫のこゑ　元勝
16 残るはあはれ物わすれくさ　玄信
17 たつねえていつよむ歌のたねならし　綱元
18 あゆみをはこふ住よしの神　元頼
19 いくたひか舟うかへけむあかしかた　兼与
20 ほとゝきすなく月の夜る〳〵　似春
21 うくひすの花になれしも声たえて　兼益
22 春くれはつる関やまのみち　立徳
23 あしからやこえむそなたにかすむらし（二）　定治
24 みゆきいつしかとけはてぬめり　松恵
25 川水のみかさそひ行なか雨に　氏伴
26 みたれうき藻やなかれあふらん　景軌
27 芦の葉のそよくかたより散てきて　玄純
28 わか里なひく雲の夕かけ　綱元
29 名残たゝなを思はるゝかへりみよ　玄信
30 ちかまさりせし中のあやしさ　兼与
31 何ゆへにかくうとまれてつらからん　元頼
32 なけのなさけもいさのちの親　兼益
33 ゆくりなく身のをき所たのみより　似春
34 蓮のうへをなけく御ほとけ　定治
35 あかつきの影をもむすふ法の水　立徳
36 引すてにたる秋のうらふね　氏伴
37 そことなくあみのうけ縄霧こめて（ウ）　松恵
38 ともなふ鞠の場そくれ行　玄純
39 鳥の音も柳か枝にやとるらん　景軌
40 また寒かれや春雨のうち　玄信
41 かすみぬる村にたく火のまたゝきて　綱元
42 たとりたとれる玉ほこのすゑ　元頼
43 草々のいつよりしけく成ぬらん　兼与
44 こゝにかしこにほたるとひかふ　立徳
45 夜半もやゝふけて行にし大江山　兼益

46 雲のたえまの月かすかなり　氏伴
47 秋かせのさそふをまゝの村しくれ　定治
48 こほれにけりな槙の下露　似春
49 色にそみ花さくかたを分々て　玄信
50 霞にそてやしほれそふらむ　兼与
51 さす舟（三）のさほとりあへぬ春の波　元頼
52 くるれはやかてこほるみなきは　松恵
53 をしかものいつくに床をかへぬらん　氏伴」
54 人かよふなり岩のかけ道　兼益
55 あつさいましのきすつへき苔地にて　景軌
56 松のひゝきそ袖にふれたる　定治
57 爪琴のしらへえならぬ宮のうち　立徳
58 たゝすみつゝも忍ひこそよれ　綱元
59 たのみつる使のいなせ待々て　兼与
60 うかれこゝろのいとゝくるしき　玄信
61 たひ〳〵にわたりこそすれきふね河　似春
62 めくみあるにや猶いのるらん　玄信
63 月はたゝあまてる神のはしめにて　松恵
64 霧もへたてぬ出雲八重かき　立徳
65 ことの葉（ウ）のいろのつたへやさたむらん　定治
66 このかみこそは家もうけつけ　兼与
67 山里の小田にかけ樋の絶やらて　玄信
68 しはしなりけり風のをとつれ　似春」
69 松原をたのむは夏の日さかりに　兼益

70 駒なつむほととをき野の道　景軌
71 かへるさをわすれはてぬる狩場にて　玄純
72 くれすくるまてくめるさかつき　氏伴
73 まれ人を待えたるこそうれしけれ　綱元
74 露もきよむる宿のしつらひ　松恵
75 今宵しもみるはことなる窓の月　兼与
76 石山寺の秋のあはれさ　定治
77 ちる花のなみやしくれにほの海　立徳
78 霞のひまの松そ木たかき　元頼
79 名声を待ほとゝきすきす春にきて　松恵
80 なをたちならすたそかれの道　兼与
81 うきこそは人めをつゝむ契りなれ　似春
82 なみたに文そまきらはしたる　玄信
83 れいならぬ心のそこを思ひやり　元頼」
84 たゝすへらきのふかきあはれみ　兼益
85 民くさもゆたかなる世の折にあひ　定治
86 ふるき軒場もつくりかへぬる　綱元
87 春の日はたえすつはめの巣にふして　氏伴
88 そゝくあまりのかすみゆく空　立徳
89 高東風やすさふとせしもをやむらん　兼与
90 こきいてけりなうらのつりふね　玄純
91 難波津や月のひかりの明はなれ　景軌
92 ひやゝかなりし浪もかたよる　松恵
93 露（ウ）なから尾花の末のみたれあひ　兼益

94　なを宮城野の真萩ふかしも　定治
95　さをしかのなれぬるこそはたちとなれ　玄信
96　人けもまれの山のすそわ田　似春
97　一節の道より道のたえはて、　立徳
98　御幸のさきはゆき、もそなき　綱元
99　大原や花にはへある袖のいろ　兼与
100　千世へん松のみとりたつ陰　元頼

政宗一句　定治　九
忠宗一句　松恵　八
玄信　九　氏伴　七
綱元　八　景軌　六
元頼　八　玄純　六
兼与　十一　元勝　一
似春　八
兼益　八
立徳　九」

寛永弍年三月廿四日

千句

初何　第二

1　鶯のやとりは竹の台かな　綱元
2　梅の若枝の花さかぬ庭　兼与
3　住所ことしの春にあらためて　定治
4　かへす田面にちかき池水　氏伴
5　草むらの萌出ぬるも浅みとり　立徳
6　けさはほたるの見えぬ片岡　松恵
7　雲はらふ風には月のさやかにて　元頼
8　秋のしくれのいつちすくらん　似春」
9　置（ウ）とてもまたはつかなる露の色　景軌
10　むら〳〵ひらく花の萩はら　兼益
11　みたる、はいくもとならしいとす、き　玄純
12　岩根つたひは雫おちそふ　玄信
13　作りぬる田つらのなかれ絶やらて　重資
14　末ひろくしも里そつ、ける　綱元
15　高屋より又引出る朝ほらけ　兼与
16　人なれつ、も猿のなく声　定治
17　世をいとふ身は猶ふかき山の奥　氏伴
18　とふ袖まとふ小野のほそ道　立徳
19　笛の音にたてしつらさも何ならて　松恵
20　見まくほしきにこ、ろうかる、　元頼
21　月にしも花のかほりをもとめより　似春
22　風にかすみのはれわたる暮　景軌
23　山（ニ）の端のいつくにかへる雁の声　兼益」
24　なかめやらる、ふるさとの空　玄純

25 難波江や漕はなれたる舟のうへ　玄信
26 おまへの沖の波そしつまる　兼与
27 雪おもき木々の梢はゆるかすや　綱元
28 猶しらゆふをかくる神杉　氏伴
29 けからひをいむ宮つこの行めくり　定治
30 袖のしたより杖そあらはす　松恵
31 春なからわくる狩場や寒からん　立徳
32 かた野のはらのあらしかすまぬ　似春
33 なかき日をくらし侘ぬる笹の庵　元頼
34 月にとはむと契りをく友　兼益
35 さすか又秋にはなさぬ中ならし　景軌
36 つみすてはやもうきしのふ草　玄信
37 をろかなる言の葉なからをし返し　玄純
38 ましはるそてのをしへこそあれ　綱元」
39 柴人をしらぬ山路のたよりにて　兼与
40 旅のつかれのくるし峯こえ　定治
41 乗駒のつまつくまゝのかけはしに　氏伴
42 雨に岸ねのくつれもて行　立徳
43 すゑ〳〵やにこりにけらし立田河　松恵
44 風のさそへる浪のたひ〳〵　元頼
45 呉竹の陰より暮やふかむらん　似春
46 あつまる鳥のいろ〳〵のこゑ　兼与
47 霧まよふ外面の野へは山かけて　兼益
48 まつてふ月にあくる玉たれ　玄純

49 たそかれやなを一しほの花ならん　玄信
50 さきそひにたる藤のいくふさ　景軌
51 波やたゝかすみによする田子の浦　立徳
52 春かせいかにふくみほか崎　兼益
53 ふねあまたつなきてかへる暮ならし　定治」
54 こなたかなたのあしの屋の道　松恵
55 山ふかきかたはらよりもほりなして　玄純
56 臥猪のすめる跡はしるしも　氏伴
57 陰高き中にかたよる小篠原　兼与
58 わくれは袖にかゝるあさ露　玄信
59 きぬ〳〵の名残をともにみにしめて　元頼
60 つくさぬはうきことのはの色　似春
61 鳥の音に明はなれたる空の月　景軌
62 行すゑいそく関の戸の道　兼与
63 納めぬるころやさたまる御調物　綱元
64 はこはんためと氷室もる袖　定治
65 あふくこそわきて聖の世なるらめ　松恵
66 えらひあつめし歌の巻々　立徳
67 むかしをも想像たるををくらやま　氏伴
68 ちれはもみちをたれかおしまぬ　景軌」
69 露霜の置そふまゝに秋更て　似春
70 ものあはれにもなくきり〳〵す　松恵
71 風かよふかへのすきまの月さひし　玄信
72 かれていろなき軒のむくらう　兼益

73 あさかほの竹のかくれに咲残り　定治
74 わかれし人もかへりこそみれ　綱元
75 あさからすいのりかけつる初瀬山　兼与
76 しのきつゝ行雪の下みち　元頼
77 さかりそとつけこす花にいさなはれ　立徳
78 かすみをくむに猶あかぬとち　玄純
79 若名あゆは水のよとみのかたつかた　兼益
80 入日しつかにうつる西川　定治
81 古にたる大井のやとり清めして　元頼
82 かきほかたふく長雨のあと　玄信
83 なよ竹や露にしたかふ陰ならし　松恵」
84 月に風なきもゝしきのうち　兼与
85 秋きては袖のあふきも捨けらし　景軌
86 とめよるかたやいきの松原　立徳
87 常磐木のよはひとなれや花の下　綱元
88 かすめるそらの露のもろこゑ　似春
89 のとけさをみせていさよふ朝附日　玄純
90 世はをしなへて春やたつらむ　兼益
91 ならしつゝ猶こゝろむる筆のうみ　氏伴
92 またいはけなき人もかしこき　元頼
93 うつほ木の陰にもとめし栖にて　兼与
94 山のかたへのふくろふのこゑ　定治
95 ねくらをもまた定めつる夕からす　玄信
96 いなりのやしろまうてたえせぬ　兼益
97 道はたゝ里よりさとに遠からて　松恵
98 いくたひさほをとるわたしふね　綱元」
99 またきにし市にと出る袖おほみ　似春
100 こえてもすゑはのこるやま〳〵　立徳

綱元　八　景軌　七
兼与　十　兼益　九
定治　九　玄純　七
氏伴　七　玄信　八
立徳　九　重資　一
松恵　九
元頼　八
似春　八」

寛永弐年三月廿四日

千句

山何　第三

1 しのゝめの雲とやいはむ花の嶺　元頼
2 かへるつはさのとをき雁の音　立徳
3 釣簾の外も長閑にあまつ風絶て　松恵
4 みきりにそゝく雨こまかなり　定治

5 三か月や出るも入もわかさらん　綱元
6 ひろき海辺の浪はすさまし　景軌
7 霧に猶ゆくかたいつち舟の上　氏伴
8 くれやすくしもなれる秋の日　玄信」
9 柴人のかへさをいそく山かくれ　兼益
10 尾上のかせそ雪をもよほす　兼与
11 いかはかりかさなりにたる雲ならん　似春
12 更にのこらすあふちさく陰　玄純
13 きけはたゝをちかへりなく郭公　重延
14 草の庵そあかしかねぬる　元頼
15 いとふ世もむかしを忍ふ心しれ　立徳
16 うき折々によむ歌の道　松恵
17 つれなきもとけんと頼む文のうち　定治
18 あたのなさけもなきにまされる　綱元
19 さめぬまは夢もうつゝとそひなれて　景軌
20 旅なる人をおもひねの宿　氏伴
21 月にさへうちすてけりなあさ衣　玄信
22 袖にしはしの秋風のなみ　兼益
23 朝露やちりつくすらむ花すゝき　兼与」
24 をしかの立所かへて行道　似春
25 野辺はたゝ奥猶ふかき山かけて　玄信
26 雲のそこより鐘ひゝく暮　立徳
27 をはつせや僧のつとめのたひ〳〵に　元頼
28 いのりにすゝはくり返してよ　定治

29 つなきをく舟のたくなは又とりて　綱元
30 みちこしうへにあらきしほ風　景軌
31 なみもはた松のこすゑはしつめかね　松恵
32 ゆふへはいとゝかほる藤かえ　玄信
33 たちこむる霞のうちの春日山　氏伴
34 そことしられぬ雉のはねをと　兼与
35 月もまた明残りたる野を広み　兼益
36 おきいてゝしも露たとるみち　玄純
37 衣手の猶ひやゝかになりそひて　似春
38 引すてにたるなみの川ふね　元頼」
39 水上やふれるあまりにまさる覧　立徳
40 つもるみ谷もきゆる初雪　松恵
41 緑なる中の松の戸明置て　兼与
42 住家のあたり茂る竹の葉　氏伴
43 暮ぬより蚊のほそ声は猶わひし　玄信
44 ならすあふきそ更にひまなき　綱元
45 袖はたゝかはる〳〵の舞にして　景軌
46 うたふ神楽は秋の夜すから　兼益
47 月にくむさけのかはらけいくめくり　定治
48 見し花おもふもみちはの陰　兼与
49 いつのまにつみすてわくる菊ならん　玄純
50 山路にたれかさきたちて行　玄信
51 梯にむすひし霜のとけわたり　立徳
52 日のかけうつるかつらきのすゑ　似春

53 けふれるやかたよりになる飛鳥河　松恵」
54 暮て一すちなみしろきいろ　定治
55 寒かへる小舟のつなて氷るらし　兼益
56 春風すさふ岩かけのみち　景軌
57 もとめつゝたそかれまてもおる蕨　兼与
58 のかれぬる身はいかにはらから　立徳
59 親のためおもふは人にをとらめや　綱元
60 むなしき影の前そえさらぬ　玄純
61 灯はつねにしもはたかゝけあけ　元頼
62 月にもめてすまなひする袖　氏伴
63 なかき夜もさしこもりたる扉にて　玄信
64 軒端にをとのしきる秋風　兼与
65 板ウまにも落る木の葉やしけからん　定治
66 都も冬は入たちてけり　松恵
67 炭うりの声する朝な夕まくれ　景軌
68 市もすかれはかた〳〵の袖　兼益」
69 住吉やとを里小野の道みえて　元頼
70 ほのかなりしもちかくなる舟　綱元
71 浪たかきまゝに吹くる奥つ風　立徳
72 うらはつたひにうき藻みたるゝ　似春
73 すむ人やあらぬ芦屋の内ならし　兼与
74 玉ほこよりもをく秋の霜　玄信
75 真砂地にすみぬる月のさやかにて　玄純
76 夜さむもしらすたつあさる声　松恵

77 花や雪老かめちにはおほつかな　綱元
78 かすむはかりの四方の山々　氏伴
79 東名風かせは雨になるより吹たゆみ　兼益
80 こきこそかへれ浦のあま舟　立徳
81 遙なるなみのうへさへ暮渡り　似春
82 難波のかねのたえ〳〵の音　定治
83 いらかたゝおりゐる雲やつゝむらん　松恵」
84 しむるやとりはやまたかきかた　兼与
85 日かすへてとるも杣木はつきやらす　氏伴
86 たちつゝきたる桧原槙はら　景軌
87 行々も霧の雫にぬれころも　玄信
88 身にしめつゝもくめるあか水　兼益
89 月をたにくらき心の法にして　綱元
90 たゝをろそかにむまるゝは何　元頼
91 たくひなくさえあるはたうらやまれ　定治
92 のほるくらゐのほとはしるしも　玄純
93 つウらきにしさすらへつるも立帰り　松恵
94 夢なる世をも頼むはかなさ　綱元
95 哀にもをとろへぬるや家のかせ　立徳
96 しらへそかはる糸竹のこゑ　兼与
97 もろこしにいにける人は猶あやし　定治
98 花のなかめやたゝ松浦舟　玄信」
99 河水も明わたりたる春の山　元頼
100 浪のおもてやかすみはれぬる　兼益

元頼　八　　兼益　九
立徳　九　　兼与　十
松恵　九　　似春　六
定治　九　　玄純　七
綱元　九　　重延　一
景軌　七
氏伴　七
玄信　九」

寛永弐年三月廿五日

千句

唐何　第四

1　たか里に又初声そほと丶きす　兼益
2　むらさめのこす夏山の雲　玄純
3　出なからまたはつかなる月影に　似春
4　うたてころもをかたしきぬめり　松恵
5　旅人をまつよやいと丶なか丶らん　景軌
6　漸寒さそふ風のたひ〳〵　立徳
7　霜しろく松のこすゑにかさなりて　兼与
8　すにふす鷺のなをほのか也　綱元」

9　田ウ面までまたきにくる丶山かくれ　定治
10　峯は春さへ霧やふかけん　玄信
11　きえて行雪はをくらの里つ丶き　氏伴
12　氷なかる丶川水のすゑ　元頼
13　萍のきしね〳〵にかたよりて　重資
14　ちらぬ柳も風之ま丶なる　兼益
15　秋もまた露にみたれて飛蛍　玄純
16　ひや丶かになるうた丶ねの袖　似春
17　酔こ丶ろまくらの月にかつさめて　松恵
18　明はては又いてんみかりは　景軌
19　大原や車をきしる道遠み　立徳
20　杉や野風のあらくふくらん　兼与
21　落くるは波にそまかふ春の花　綱元
22　滝のうへなる藤はいくふさ　定治
23　かすみぬる岩ほは梅のめくりにて　玄信」
24　ゆふへ〳〵にならす笛の音　氏伴
25　たえすしも他国よりかよふらし　元頼
26　ふかきちきりの程そしらる丶　玄純
27　うらなひにまかするこそはえにしなれ　兼益
28　かし葉は水にうけしつめつ丶　松恵
29　時いたる賀茂のまつりやいそくらん　似春
30　行つとひぬるこ丶のへの袖　立徳
31　今宵そと誰かはめてぬ空の月　景軌
32　秋のさかりのすきなんはおし　綱元

33 ませ垣にあまりてあやし菊の枝　兼与
34 雨はり見する庭のやり水　玄信
35 つり殿のかたにはしゐを求寄　定治
36 池のあたりにたかき呉竹　元頼
37 末遠（ウ）くほり渡したる小田の原　氏伴
38 くるれはそてのかへる片岡　兼益」
39 照日には森の木陰に休らひて　玄純
40 草かふまゝに駒いはふなり　似春
41 俄にもしつかまへ野や立あらし　松恵
42 あられふりいる笹の屋のうち　兼与
43 夢はたゝみつきもやらす覚けらし　立徳
44 ねしおもかけもあやなてさくり　定治
45 つま貝を波のひまにやひろふらん　綱元
46 あへすひかたとなれるはつ塩　景軌
47 くれて月ひろき真砂にさしうつり　元頼
48 冷しかれや古みやのうち　玄信
49 色にみしさほの山辺の花ちりて　兼与
50 過行はるやよふこ鳥なく　松恵
51 けふ〳〵と永日送る隠家に（三）　定治
52 まなふさうしをまき返しぬる　立徳
53 えらふこそわきてすちある歌ならめ　景軌」
54 かしこさいかに中のうち人　玄純
55 世のうへをあつかり申まつりこと　松恵
56 鬼の名をいふ時やきぬらん　綱元

57 たちよるは哀なりけり塚の前　元頼
58 ふみとゝろかしなるかみの空　兼与
59 侘しさをいつまてたへてすまの浦　兼益
60 わくらはにとふ人たにもなし　定治
61 しろかみとなりぬるこそはくるしけれ　玄信
62 むかふかゝみに涙おちそふ　氏伴
63 ことさらに後のあしたの物思ひ　似春
64 たもとに月の影そのこれる　綱元
65 さむしろの露ははらひも捨やらて（ウ）　兼与
66 もるに山田のいとゝかなしき　玄信
67 くるゝより尾上にならす鹿の声　立徳
68 さひしかりけり高円のみや　似春」
69 かれつゝも野もせに年をふるえ草　定治
70 たかすみすてし跡としもいさ　兼益
71 一筆はそれとはかりの文にして　玄純
72 ふかくよそ目をはちらへる中　景軌
73 こゝろこそゆけ共人のそむくなれ　綱元
74 何によりてかうらみもとむる　松恵
75 咲比はつけこん花のつてたえて　玄信
76 をそきさくらは猶くらふ山　元頼
77 春の夜の月や霞にこもるらん　氏伴
78 声にしられて雁そわかるゝ　兼与
79 風送る舟（名）はいつしかとをさかり　立徳
80 行衛まつらの姫のあはれさ　松恵

81 川水にたくふはかりのわかなみた　兼益
82 なとかは罪のふかくなるらん　綱元
83 ゆるさるゝ中にあさきは袖の色　元頼」
84 まもるを折もちる冬の梅　玄純
85 初雪の爰にかしこにそゝき捨　似春
86 小鷹すへ野の道ははるけし　立徳
87 とひよれる大井の宿は秋のくれ　兼与
88 月にしひらく陰の松の戸　定治
89 槿は夜をこめつゝも色めきて　景軌
90 をくかうへにも露やをきけん　氏伴
91 涼しさはたゝ夕立の跡なれや　玄信
92 ひゝきそまさる滝つしら波　兼益
93 入会のかねはわひしき花の峯　松恵
94 なひくやなきのかつらきの山　立徳
95 いとゆふは日のさすかたに顕れて　兼与
96 あるかなきかにすくす世そうき　元頼
97 朝夕にたのみをかけし宮つかへ　綱元
98 清めなれたる神のひろまへ　兼益」
99 立ゐする翁のすかたあやしまれ　定治
100 網引のなは、波のまに〳〵　玄純

兼益　九　　定治　九
玄純　八　　玄信　八
似春　七　　氏伴　六

松恵　九　　元頼　八
景軌　七　　重資　一
立徳　九
兼与　十
綱元　九」

寛永弐年三月廿五日

千句

二字反音　第五

1 岩かけの松をもむすふ泉哉　定治
2 こけのしけりの道分し袖　玄信
3 谷ふかみほくしさしつゝ暮待て　兼与
4 月出ぬまのやまのかたはら　立徳
5 あつさまた残る戸ほそをひらき置　似春
6 みきりはむしの声はつかなり　氏伴
7 霜に猶野や草むらの枯ぬらん　綱元
8 冬にも萩そかせをふくめる　松恵」
9 音あらくよせくる波や浜つたひ　玄純
10 夕になれはかへるつりふね　元頼
11 住家もや山のあなたにしめけらし　兼益
12 こゝろを友とする世捨人　景軌

13 むなしきか俤をのみたのみなれ　重延
14 すみはなれぬもあはれよもきふ　定治
15 つかふるはさそなしたしき中ならん　玄信
16 よみかはしたる歌のたひ〳〵　兼与
17 石文やしのふる道のいかはかり　立徳
18 おもひかくるは身におはぬ人　似春
19 いはけなきによはひたけても契り置　氏伴
20 めくりあへとやたのむ下帯　綱元
21 月花のかけもはかなき玉水に　松恵
22 ちりうかひぬるきしのやまふき　玄純
23 程(二)をへてかすみにあめやそゝくらん　元頼」
24 ふかきも雪のきえまそふ峯　兼益
25 すみかまのほとりは冬もあたゝかに　景軌
26 しはしはかりとやすむかり人　玄信
27 末もなをつゝく紅葉は分残し　定治
28 たちとなからのさをしかのこゑ　立徳
29 霧にまた陰野の原の明やらて　兼与
30 月入あともまくらしくなり　氏伴
31 もろともにわかるゝきはやなけくらん　似春
32 ぬしありつるに契りかけてよ　松恵
33 あたなるとわか心しるかへりみよ　綱元
34 手折てこしも桜うつろふ　元頼
35 かすみぬる山路やなをも遠からん　玄純
36 やせたる駒は春もいさまぬ　景軌

37 下萌(ウ)の野はいつしけく成なまし　兼益
38 露にいろみん荻よすゝきよ　定治」
39 村雨の跡ひやゝかにこすまきて　玄信
40 月もおちくる風の真木の戸　兼与
41 なかき夜にいくたひ夢の絶ぬらん　立徳
42 物おもひつゝたゝあちきなし　玄純
43 ましはりもうちひそみたるよそひにて　松恵
44 ほゝえみかほの見えぬみとり子　綱元
45 物ことのみちのをしへをそむき捨　氏伴
46 いたつらにしもすくる年月　似春
47 いかてかはをかさぬつみにしつむらん　兼与
48 みやこはなれてうき田舎住　立徳
49 花なりしすかたもかゝるをとろへに　景軌
50 かすみもつゆも袖をうるほす　元頼
51 なきあ(三)とのいみにこもるは日なかくて　定治
52 きくもかなしなくほとゝきす　松恵
53 あれにたる軒に生そふ忍ふ草　元頼」
54 松のあらしのすさましき宿　兼与
55 秋の夜や猶はたね覚かちならん　綱元
56 ふるきまくらの露そ物うき　玄信
57 わかれしを折々月に思ひ出て　兼益
58 しのきて入もわひし野の宮　定治
59 草々や冬きてはみなしほるらむ　兼与
60 霜ふかゝれや笹のくま〳〵　景軌

61 けたもの、かよひし跡はさたかにて　立徳
62 ふもとのはらの明はなれたる　似春
63 一すちの雲やうかふもきえぬらん　玄純
64 すさふをま、のかせの中空　氏伴
65 竜（ウ）とりも飛かとはやきおきつ舟　松恵
66 くちらあらはれ波たかきくれ　定治
67 みちそひてみをさかのほるしほ時に　景軌
68 今宵の月のなかめあやしも　玄純」
69 あは島や末まて霧の晴わたり　似春
70 つらなりつ、も雁の行空　元頼
71 しつかにもなりてやあくる朝朗　玄信
72 うすくもりしてひかけいさよふ　松恵
73 木のまをや咲かくすらむ花のみね　兼与
74 伊駒のかたのふる春の雨　立徳
75 難波潟かすみなからにくれかゝり　氏伴
76 かねをしるへに行たひの道　綱元
77 ひろき野のかりねの枕起わかれ　定治
78 けふも鹿子の跡したふ也　兼益
79 たかかやのかけにはいと、みたれあひ（名）　立徳
80 もとめんいろもいさをみなへし　玄信
81 ふか、りし霧にこもれるまつち山　松恵
82 角田川原も露やしけ、む　兼与
83 あかつきはなをしも月のさやかにて　元頼」
84 をこなふこゑのすこき室の戸　似春

85 頼よる袖はもらさぬ法の師に　綱元
86 たえすたき、をひろひもそする　玄純
87 山はた、あたりにちかき住所　兼益
88 かきほのうちもふく初瀬風　定治
89 時雨にやなみのひ、のきほふらん　兼与
90 ちりし木の葉は滝つ水上　景軌
91 岩かねのやなやくつれもそひけらし　氏伴
92 霧のひま〳〵見ゆる土くれ　兼益
93 かるもかく臥猪（ウ）の床は秋の野に　定治
94 人かけたえぬやまさとの道　兼与
95 問袖やこ、ろの花をおもふらん　綱元
96 香はもれいつるくれなゐの梅　立徳
97 そことしもわかれすくらき春のよに　玄信
98 うくひすの音は玉ほこの末　兼益」
99 一むらの竹とみつるも奥ありて　元頼
100 つくりすへつ、軒端かさなる　松恵

定治　十　　玄純　七
玄信　八　　元頼　八
兼与　十一　　兼益　八
立徳　九　　景軌　七
似春　七　　重延　一
氏伴　七
綱元　八

松恵　九」

寛永弍年三月廿五日

千句

何路　第六

1 見ぬ人はよるのにしきそ萩か花　松恵
2 たとり行野の月をそき影　元頼
3 ゆふへよりほのめく虫の音をとめて　綱元
4 たもとにふる丶露のす丶しき　似春
5 竹の葉の釣簾巻かたにそよき入　定治
6 窓にむかひの山そまちかき　玄純
7 弥生よりまちてやきかむ子規　玄信
8 雨こそおつれ藤のたそかれ　氏伴」
9 かすみつ丶すゑ猶分ぬ池の水　兼与
10 風しつまれはとつるうすらひ　景軌
11 明てたに日の影さゆる岩かくれ　兼益
12 つもりてをもる雪の松かえ　立徳
13 端ちかくならせる袖もおくまりて　重次
14 うへのしなにやなる宮つかへ　松恵
15 時にあふ人をは誰もそねま丶し　元頼
16 さえあるはた丶あはれすくなき　綱元
17 つらぬるは月にめて丶のやまと歌　似春
18 こよひの手向いかに七夕　定治
19 糸竹や身にしめつ丶もしらふらん　玄純
20 住袖あやし御木丁のうち　玄信
21 こ丶ろた丶花のかたちにまとはして　氏伴
22 のとけき鞠の名残こそあれ　兼与
23 かすめるやふるとは見えぬ雨の暮　景軌」
24 床しめやらて雲雀啼空　兼益
25 あはつ野や狩行もた丶絶るに　立徳
26 やはせのかたや袖こそるらん　元頼
27 わたすへき舟のをそきを待々て　松恵
28 はるかなりけりすゑの一むら　似春
29 暮ぬれは山へを宿となすもうし　綱元
30 なつはさくらのちりはつる陰　玄純
31 いつしかにさかりとみする花卯木　定治
32 ほと丶きすくる声はあやなや　氏伴
33 契りをく中の戸さしをた丶きより　玄信
34 我なからた丶うき新まくら　景軌
35 月にしもしのふはあはれ人たかへ　兼与
36 あきになさる丶えにしくやしき　立徳
37 あたなりとしらぬはつらき袖の露　兼益
38 つめはすみれのしほれぬる道　松恵」
39 野へはた丶かすみのひまにへた丶りて　似春
40 よりてうくひすこゑをくらへよ　綱元

41 かはつなくなかれは園のかたはらに　氏伴
42 雨そゝきする里のさひしさ　兼与
43 袖ははた田面の庵にひき籠り　玄純
44 またきよりしもくるゝ山あひ　玄信
45 朝霧のはるゝとみしも又たちて　元頼
46 とたえにうかふ秋かせの雲　定治
47 月に漸わたりにけらし天津雁　松恵
48 こすゑつゝきのいろになる比　景軌
49 三吉野や奥まて花のさきみちて　立徳
50 あおねかたけのかすみきえたる　兼益
51 春の日のかけしつかにもさしのほり　兼与
52 うしほのなみもよする淀川　元頼
53 人あまたもとむるみるめ貝つ物　定治」
54 みたれ藻くつのこゝかしこなる　立徳
55 野へや猶たえす臥猪のかよふらん　兼益
56 遠さかりたるおほかみのこゑ　松恵
57 嶺も尾もひとしく雪の降かさね　玄信
58 炭やくかたはけふりにそしる　兼与
59 とひよるにむなしきあとは涙にて　綱元
60 一夜二夜の契りくるしき　似春
61 うかれめの名残を思ふ月の前　玄純
62 野上のさとのわかれすさまし　定治
63 露しのく不破の関屋の明はて、　景軌
64 風にたえたるすゝむしのこゑ　氏伴

65 うらかれになる草々の陰を浅み　松恵
66 古沼はたゝみさひぬにけり　玄純
67 いつよりかつくり捨田の末ならん　立徳
68 おさまれる世をまつかひさしき　景軌」
69 こゝろたゝ猶やすからぬわかみにて　似春
70 あふにおもひのいやまさりぬる　玄信
71 きぬの香はかたみかほにも残るらし　氏伴
72 ぬきかへなんはうき花の袖　兼益
73 舞姫もなかき日かりも限あれや　兼与
74 暮行はるもいたくしたはし　綱元
75 なつまても咲かけふかき岩つゝし　定治
76 谷の小川の底いさきよき　立徳
77 汲よらんみつをよすかの庵りにて　元頼
78 月かけうつる寺のさし入　似春
79 折（名）にあひて玉まつりする塚のまへ　景軌
80 草葉の露を衣手のうへ　兼与
81 分る野も暮れはやかてかり枕　兼益
82 たひの行衛はそことしもいさ　元頼
83 和田の原波にや舟をまかすらん　立徳」
84 風のまに〳〵星くらきほと　松恵
85 ともし火のきゆる乱碁けちさゝて　綱元
86 やをらよりつゝあかぬかいまみ　定治
87 おほけなきに契りかくるはかなしな　玄純
88 すゑいかはかりうちとけん人　似春

89 はちらふはいはけなきみのならひにて　氏伴
90 つゝけかねたるしき島の道　兼与
91 更ぬれはえひをくはふる月の下　玄信
92 菊のにほひをふれふるゝとち　兼益
93 ひろ沢のほとりをこめし霧分て　兼与
94 吹をとすなりさかの山風　立徳
95 天つたふ日の色かくす峯高み　定治
96 なひくくもりや時雨なるらし　玄信
97 雪にしもまかへる花のちりいて、　元頼
98 なかはなりしは末おもふはる　綱元」
99 巣にふしてはこくみたてん鳥の声　松恵
100 えたふかくしもならふむら竹　景軌

松恵　九　兼与　十
元頼　八　景軌　八
綱元　八　兼益　八
似春　八　立徳　九
定治　九　重次　一
玄純　七
玄信　八
氏伴　七」

寛永弍年三月廿五日

千句

何人　第七

1 曇りなき月も野寺の鏡哉　立徳
2 ちくさの露をしのきこし暮　似春
3 さをしかの声や門田に近からん　景軌
4 山をあたりにかけてすむ里　兼益
5 涼しさを袖におほゆる風落て　兼与
6 や、入そむる松原のみち　定治
7 こもり江の舟に枕をおきわかれ　松恵
8 名残もかりの明わたるそら　元頼」
9 たなひける霞の末に雲見えて　綱元
10 いさよふ春の日かけほのめく　玄信
11 しつかにや改りたる年ならん　玄純
12 筆こゝろむるおりのことの葉　氏伴
13 かはらけはめくらす後もとりかはし　元勝
14 紅葉むしろにまとゐせし袖　立徳
15 霧わたる山路を跡に分すて、　似春
16 月こそ友といそくたひ人　景軌
17 いつかたに草の枕をさためまし　兼益
18 あまたのさとのくるゝ野の末　兼与
19 あけまきや牛かひつれてかへるらん　定治
20 はみし秣の中そ出ぬる　松恵

21 山の井のあさくも花の散敷て　元頼
22 あたなる人は春おしまめや　綱元
23 長閑[二]にもねぬしとねこそ恋しけれ　玄信」
24 よはひたけては思ふいにしへ　玄純
25 立ましるすかたはちらふ宮つかへ　氏伴
26 衣のいろのなみならてうき　似春
27 法の師のいさめにたかふ哀しれ　立徳
28 わか身のつみをなとつくるらん　兼益
29 朝夕のすさひなりけり鵜かひ舟　景軌
30 かつらのさとに川そまちかき　定治
31 聞たひにもの侘しさや波の音　兼与
32 たえすふく也陰の松かせ　元頼
33 末の秋うらみかほする真葛葉に　松恵
34 かこふもひまをそふる露霜　玄信
35 老ぬるをなけく涙のみにしみて　綱元
36 月もめてしとすつる世の中　氏伴
37 さとりつる[ウ]心はなにゝそみてまし　玄純
38 夢かうつゝかえこそわかれね　立徳」
39 おもはすもたのめぬ人のとひよりて　似春
40 かくことよきに契りしはうき　景軌
41 うらうへのあるも後こそしられけめ　玄信
42 あととめて行住よしのさと　兼与
43 一こゑはそことしもなき郭公　兼益
44 雨雲かゝりなをしけき森　元頼

45 神のますところえて咲花の色　定治
46 なかき日こそはまうて絶たる　綱元
47 かゝけをく春のともし火かすかにて　氏伴
48 霞のそてやくめるあかつき　松恵
49 かけみつゝすましなれなん胸の月　兼与
50 あたにちりぬる松の戸の露　玄純
51 吹[三]もたゝ音しをとせぬ秋の風　立徳
52 いくたひかはる嶺のむら雲　似春
53 乙女子か天くたるかと猶あやし　松恵」
54 もとめし人はたゝ竹の中　兼与
55 鶯を冬にもよまむ歌のたね　綱元
56 ちかきも春はまたたゝぬ宿　兼益
57 九重や関のあなたの朝霞　定治
58 花かへりみてこゆるすゝかち　玄信
59 山たかみ雪はみなから消つくし　玄純
60 雨にみかさのまさる川をと　景軌
61 塘をやつきそへぬらんむらのおさ　兼与
62 うへをくまゝの竹のいくもと　氏伴
63 袖あまた月にさなへをとりはこひ　元頼
64 こなたかなたの里の行かひ　立徳
65 暮[ウ]ぬれはあへす神楽を催して　玄信
66 すむなかれてはくまぬさかつき　兼与
67 旅たつか遠き行衛や思ふらん　兼益
68 なくなりはつるきはそ恋しき　定治」

69 見し夢の跡はなみたの落そひて　似春
70 つれなきもかつとくる下ひも　元頼
71 つほみより露にふれての桜花　松恵
72 かすむひかりはさすとしもいさ　玄純
73 山は月心あてなる春のくれ　定治
74 窓ちかゝりし竹そうつせる　綱元
75 鳥のこゑあつまりぬるも遠さかり　立徳
76 たそかれいそく野への末々　兼益
77 かへるさは狩せし人の跡さきに　景軌
78 折かさしたる草のはな〳〵　氏伴
79 野分名をもしらぬまかきは奥有て　兼与
80 いくへはかりの霧のふりそふ　松恵
81 秋さむき月に衣やたのまゝし　綱元
82 うたふもいもか門のやすらひ　玄信
83 ほの見つるかたちはなかき思ひにて　元頼」
84 かほるけふりにかへす玉しゐ　立徳
85 今しはとひらけ出たる梅の花　玄純
86 四の海まて春そしらるゝ　定治
87 君か代はうらゝかに雨風もなし　松恵
88 たえすも袖のつとふ都路　似春
89 逢坂の関はる〳〵と明はなれ　兼益
90 いさむをまゝの駒いはふなり　景軌
91 かす〳〵の音も車のとゝろきて　氏伴
92 けふのまつりそたれもあかむる　兼与
93 賀茂川や水猶きよくなかれそひ　似春
94 瀬ゝこすすゑのしろき夕波　松恵
95 山陰の道たと〳〵し岩つたひ　立徳
96 いつくにわたしかふるかけはし　兼益
97 横雲はすさふ嵐にさそはれて　兼与
98 日めもす鳥のやとりいてゆく　玄信」
99 松杉の花にや人のならすらむ　綱元
100 さかふる藤や春か野の宮　定治

立徳　九　綱元　八
似春　八　玄信　八
景軌　七　玄純　七
兼益　九　氏伴　七
兼与　十一　元勝　一
定治　九
松恵　九
元頼　七」

寛永弐年三月廿六日

千句

何田　第八

1 一とせに又や桜の紅葉狩　玄信
2 霞に見しも秋霧の山　氏伴
3 尾上こそ雁の翅の遠からて　兼益
4 いろに田面や猶なひくらん　玄純
5 月やとす薄か末の露をおもみ　松恵
6 風に野沢の浪やかけぬる　元頼
7 水にかけぬれて夕にとふ蛍　定治
8 なかれやそゝくあまりなるらん　兼与」
9 呉竹はふかき煙のうちにして　似春
10 かた岡のへのさとはいく里　立徳
11 一すちの道やちまたにわかるらん　景軌
12 物見過にし袖のかた〳〵　綱元
13 人ことにめつる花野も枯そめて　重延
14 たえすきかはや松虫のこゑ　玄信
15 更ゆけは影やゝ寒き夜はの月　氏伴
16 いくたひ秋の時雨せし空　兼益
17 えならぬは今初雪のなかめにて　玄純
18 くれはつるまてをはしまの袖　松恵
19 滝殿のうちやあつさもしらさらん　元頼
20 くたけてちるもたかき岩波　定治
21 花のえにふきそひぬるや松の風　兼与
22 はるかに藤のかほりくる道　似春
23 かすむその奥やうき雲の宮所　立徳」
24 おもふも神のむかしあやしき　景軌
25 うらみぬるすゑやむくひのありやせん　綱元
26 ちかひしもはたあたとなる中　氏伴
27 うき世にやつれてうつろふ人心　玄信
28 時めけるにはしたかひぬめり　玄純
29 あやなくもをしやられぬる車にて　兼益
30 田つらに水やくみも捨らん　元頼
31 池も猶うつむ菱つる真葛原　松恵
32 いつくのかたになるゝにほ鳥　兼与
33 砂にしむれゐる鷺の声はして　定治
34 入日のかけの残る山きは　立徳
35 待えつゝいつかむかはん嶺の月　似春
36 旅たつあとにひとりすむ秋　綱元
37 いくゆふへとりいてゝしもうつきぬた　景軌
38 さひしかりけり伏見野の末　玄信」
39 かりはらぬ冬田のはらは霜をきて　兼与
40 人もかよはぬ里の一かた　似春
41 隣たになき栖こそあはれなれ　元頼
42 みたれし国はおさまらぬ比　松恵
43 かしこきは入江を遠み釣たれて　玄純
44 住すてにたる笹ふきのうち　兼益
45 ふせくにも吹くる風の音はけし　立徳
46 たのむふすまを引かつく秋　定治
47 野辺にしもなきし鶉の声とめて　綱元
48 あけはなれたる山もとの月　兼与

49 雪とのみいつしか花のひらけ出　氏伴
50 はれわたりぬる春雨の空　景軌
51 ひかりさすかたにや蝶のみたるらん　玄信
52 寒さはなをも賤か垣うち　立徳
53 焼ぬるもけふりみしかき爪木にて　兼与」
54 なを風あらくなりまさるくれ　元頼
55 村竹のはやしは虎もふす計　定治
56 むさし野みてはおもふもろこし　綱元
57 聞えある名や富士よりも高からん　松恵
58 かけしちきりは玉の緒のほと　兼与
59 たひ〳〵の人の情の忘られす　似春
60 えらひにもれぬ歌のしな〳〵　玄純
61 つき〳〵にめさるゝこそは司なれ　兼益
62 かたつ田捨に住つける秋　氏伴
63 こよひしも都の月をなかめやり　立徳
64 風のまに〳〵夢そさめぬる　景軌
65 波もたゝ入海とをきとまり舟　兼与
66 あすはこえなん末のやま〳〵　定治
67 夏の日やわかれかねしも松の陰　綱元
68 しくれときくは蝉のこゑにて　松恵」
69 玉琴をならすには猶なみた落　玄純
70 たゝ野の宮のすまゐとふ袖　兼益
71 かこてるも又忍ひよる中にして　元頼
72 へたゝりにたるほとのくやしさ　立徳

73 おほえすもさかしらするはいかならん　景軌
74 おなし御前に仕てし人　玄信
75 たれもたゝ折にあへるはしたひきて　似春
76 つくる四町はわきてことなる　兼与
77 月花をたつる屏風のうつし絵に　兼益
78 ひゐなあそひは春のたはふれ　定治
79 いとき（名）なきほとは心ものとかにて　元頼
80 うき世もしらぬ身こそやすけれ　綱元
81 ふかくしもすみならひたる山の奥　玄信
82 里にはいかていてぬあらくま　兼益
83 くれわたるみちのほとりに鳴きつね　兼与」
84 草はしほるゝふる塚の陰　似春
85 風はたゝ松のあらしに音そひて　氏伴
86 よせこそかへれしかのうら波　景軌
87 こゝもなをわかかたになるかた田舟　定治
88 日はかたふけるあみのうけなは　玄信
89 道はたゝたえ〳〵くらき岩かくれ　松恵
90 苔地のすゑの露そ分ゆく　玄純
91 霧ははた槙のはつたひ立こめて　立徳
92 そことしもなき月の山のは　元頼
93 入会のこゑはいいつ（ママ）くの寺ならん　兼益
94 ひろき野中は猶たとる袖　似春
95 草村のかけの清水は結ひわひ　定治
96 道かと見しも末はつゝかす　立徳

97 いつ乗て跡はたえたる馬つくり　松恵
98 ひま〳〵も又ふれるしら雪　玄信」
99 下もゆる草もや花をさそへかし　綱元
100 春よりきくをうつしをく庭　兼与

玄信　九　似春　八
氏伴　六　立徳　九
兼益　九　景軌　七
玄純　七　綱元　八
松恵　八　重延　一
元頼　八
定治　九
兼与　十一」

寛永弐年三月廿六日

千句

白何　第九

1 天人や雲にうへけんみねの松　兼与
2 春やゝちかみひらく真木の戸　綱元
3 うくひすの音を明ほのに聞初て　玄純
4 かすめる月に分る野の末　玄信
5 長閑なる浪にも舟をつなき捨　兼益
6 暮わたるらし遠の海つら　似春
7 見る〳〵も空は雨けを催して　景軌
8 うかひ出たる雲のむら〳〵　立徳」
9 吹ウとふく風を翅の雁のこゑ　氏伴
10 かり田のはらや人かよふらし　元頼
11 冷しき霜の芦やも住なれて　松恵
12 いく秋をくる三島江の里　定治
13 月こそはかはらぬ影のなかめなれ　重資
14 しけきもみちもちりてゆく山　兼与
15 雨晴る跡よりすさふ夕嵐　綱元
16 やとりをいてゝ旅は物うし　玄純
17 けふことに都わすれぬ哀しれ　玄信
18 ふりすてぬるもいかに鈴鹿路　兼益
19 めてあかぬ心の花の色香にて　似春
20 梅の木すゑに来ぬる鳥の音　景軌
21 日のうつるかけにこてふの飛乱れ　立徳
22 かすみはれたる野への一かた　氏伴
23 朝風二や吹かとせしも過けらし　元頼」
24 まくらのかちをとる舟のうち　松恵
25 音きけは袖にまちかくよるの浪　定治
26 夢のつけをしたのむともなき　綱元
27 つれなきかこゝろはとけん物ならて　兼与
28 かけはなれんをかなしめる中　玄信

29 うらかたに又とひよるはいやはかな　玄純
30 いかてかたひにほとをふる人　似春
31 袖はまた神のおりゐの宮のうち　兼益
32 松もよはひのさそありす川　立徳
33 かも山やたちすゝみぬる夕〳〵　景軌
34 ふもとのみちは月をそきかけ　元頼
35 守かたに引は侘しき田つらにて　氏伴
36 露にしくれにたのむ藤蓑　定治
37 いやしきに遠を人はまかふらし　松恵
38 つかれきつゝもやすむつは市　兼与」
39 たつねよりなさけくみぬる三輪の里　綱元
40 よとみしをやゝなかす河水　玄純
41 うすらひの結ふとするもしはしにて　玄信
42 あしたの日かけさす岩かくれ　兼益
43 ねくらをや出てあされる鳥ならん　似春
44 稲葉ほのかに竹なひきそふ　景軌
45 むら雨のあと猶霧のふかゝれや　元頼
46 神なりやます月見えぬ空　松恵
47 けしきたゝつねにはかはるいなひかり　定治
48 袖いそきつゝかへるさの道　兼与
49 たをれるはたか家つとの花の枝　立徳
50 みやこのうちの春そことなる　氏伴
51 志賀のうらややそのみなともかすむらし　兼与
52 夜のまはかりの比良のねおろし　玄信

53 初雪のきえも残らぬ朝ほらけ　景軌」
54 さゆるとやなき遠方の里　似春
55 あつまるは竹の林のむら雀　兼益
56 ひろき野へにや入小鷹かひ　定治
57 さかつきや猶あたゝめてすゝむらん　玄純
58 秋にもとめし友そ老たる　綱元
59 つむ菊になかきいのちはねかへたゝ　松恵
60 みとりのほらの月にめてなん　立徳
61 かさなれる雲も夕はひまそひて　氏伴
62 しつけきかせも又かはるらし　兼与
63 うかへぬる舟はほとなく遠さかり　元頼
64 みちしもひくはしるきしほさひ　兼益
65 みたれ芦の爰にかしこにそよめきて　立徳
66 飛かとはやきつるふちの駒　玄信
67 かよはくもなるはひつしのあゆみかは　定治
68 つらぬるうたもたしかにはなき　松恵」
69 思ふにもそのかみの代の遙にて　兼与
70 さそあふくらんみつのすへらき　玄純
71 月影をよすかとなして送らまし　綱元
72 とはれぬはたゝみにしめてうき　氏伴
73 秋風のあたなる中にたきそめて　松恵
74 むすひもとめぬ草むらの露　兼与
75 けたものゝ暮れはかよふ野を遠み　景軌
76 人の住家のみえぬ山あひ　似春

77 かねこそは寺をしらすれ花の嶺　兼益
78 霞にきゆるつねのともし火　元頼
79 はしたてや明はなれたる春の波（名）　定治
80 与謝のうら風音そ絶ぬる　立徳
81 跡先に漕行ふねのかす多み　似春
82 国ほろほしにむかふものゝふ　松恵
83 こゝろをしまとはすこそは女なれ　玄信」
84 春日のさとのあかぬかいまみ　景軌
85 たひ〳〵にさほのやまとち分てきて　元頼
86 ころものすそのさそなやつるゝ　綱元
87 かり臥はなれぬる朝な夕露に　玄純
88 散もそへたる手まくらの月　定治
89 秋の夜の時うつりても戸さしせて　兼与
90 すゝしきかせや軒のした荻　兼益
91 あさかほはいつ咲てみん色ならん　松恵
92 たけのほりたるひかりさやけし　氏伴
93 霜（ウ）とくる山の雫の落そひて　立徳
94 ほそきも水のたえぬ谷あひ　定治
95 みちはたゝそれとはかりの笹葺に　元頼
96 いつよりつくり捨田なりけん　兼益
97 かたをしもかへす鹿子のたゝすみて　玄信
98 犬つれつゝも行やさと人　綱元」
99 玉ほこのすゑふみしらぬ花の陰　兼与
100 たくひもまれの桃ひらくいろ　似春

兼与　十一
綱元　八
玄純　七
玄信　八
兼益　九
似春　八
景軌　七
立徳　八」

氏伴　七
元頼　八
松恵　九
定治　九
重資　一

寛永弐年三月廿六日

千句

何木　第十

1 神代よりかけをつたへん庭火哉　忠宗
2 いかきのうちは霜をかぬ色　政宗
3 春ちかみ松風にほふ梅さきて　元頼
4 明すきぬより分る谷あひ　兼与
5 山川のをふねやさほにまかすらむ　玄信
6 けふ又月に柴はこふ袖　綱元
7 末遠く暮わたる野の露ふかみ　立徳
8 えらひてつまむ秋の草々　定治」

9 松虫やすゝむしの音はとめあかて　兼益
10 入日のあつさのこさゝる道　松恵
11 やすらふもしはしなりけり山の陰　似春
12 一むら雨やはれてゆくらん　景軌
13 槙の葉も若葉も露の結ひなれ　氏伴
14 桧原のおくそ夏ふかくなる　玄純
15 玉鉾の末に夕の風おちて　元勝
16 さらに爪木はもとめかねけり　元頼
17 岩か根やふりつむ雪のいかはかり　兼与
18 わかぬ田つらはかりすてし跡　玄信
19 里人も秋にこゝろやうつるらん　綱元
20 月をともとしをくるいくとせ　立徳
21 立かへり見はや都の春の花　定治
22 霞にとをくなる志賀の山　兼益
23 浦波に岩をとゝめぬ雁の声　松恵」
24 なきさに舟をさしうかへぬる　似春
25 海士人の栖は岩のかくれにて　景軌
26 引かさぬるはたゝこけ衣　氏伴
27 末も猶森の木葉の散つくし　玄純
28 ときはの里に遠き鹿の音　兼与
29 山ははた秋の嵐の吹しけり　元頼
30 いとゝしくたゝはたへさむけし　綱元
31 たくへつゝ酌こそかはせ菊の水　玄信
32 月やめてよる仙人の宿　定治

33 あやしきはつもるよはひの程にして　立徳
34 ゆかりをさへもおもわすれけり　松恵
35 なけくこそ今はのきはのこゝろなれ　兼益
36 わかるゝそてそしはしひかふる　景軌
37 あらはすははかなかりける恨にて　似春
38 つれなき文を巻返しつゝ　玄純」
39 物やみとなりなむはうきかた思ひ　氏伴
40 出ていにしをしのふるはなに　元頼
41 籠にかふも馴ぬ鳥こそあやなけれ　兼与
42 ほのめくむしの声のあはれさ　玄信
43 草の花おつる紅葉の色かりて　綱元
44 外面は秋の霜やふりけん　立徳
45 みかうしも冷しき夜はおろしをき　定治
46 月またをそき末の山の端　似春
47 かけはしは幾重の雲のわたすらん　松恵
48 たとりきそ路そくれはてにたる　景軌
49 さらしなやあまたの花のかけ分て　兼益
50 千里のほかも長閑なる比　兼与
51 朝三またき小弓引野にいさなはれ　玄信
52 あるしまうけのさためしてけり　定治
53 君か代をのかれし人も又いて、　玄純」
54 みかくに玉のひかりたへなる　氏伴
55 月は猶ほり江の水にふけわたり　兼与
56 わかこゝろしり秋にとへかし　綱元

57 なれもものの思ひてやなくきり〳〵す　立徳
58 わひつゝもすむ浅茅生の陰　松恵
59 風にしもうすきはしつかあさ衣　景軌
60 はらふとするもそての夕霜　兼与
61 すきま猶しけくなりたる草の庵　似春
62 われ樋にはたゝ水もたまらぬ　兼益
63 いつよりかかくあらしをく小田ならん　元頼
64 ほそきも道はあらぬ山かけ　玄信
65 杣木引縄手もさらに朽はてゝ　定治
66 宮つくりするほとやへぬらん　立徳
67 あさからすいきふれいとふ神慮　兼与
68 うふやのうちにこもりつゝすむ　景軌
69 おもひぬるすゑはすかたもやつれそひ　綱元
70 とひよるときもそむきかほなる　元頼
71 物はちはいはけなきまのならひにて　兼益
72 筆のすさひもたゝとりの跡　定治
73 古にたるしやうしは床のかたはらに　氏伴
74 ふくともしらぬ秋のさ夜風　似春
75 入までもなかめすてしの空の月　玄信
76 冬ちかくしも猿のこゑする　綱元
77 雪きえしいろをのこせる花の枝　松恵
78 折とる梅をかさしぬる袖　玄純
79 かすみ行北野のやしろたつねより　立徳
80 しのきいてたる舟岡のかけ　兼与

81 草むらの露に夏をも忘れはて　兼益
82 空になりつゝ蛍とひかふ　松恵
83 かすそふやかはたれ時のほしならん　定治
84 月にねふらてむかふみたれ碁　景軌
85 そちこちとうらみあらそふ秋はうし　綱元
86 袖におちぬる涙身にしむ　立徳
87 つれなきに思ひのほとをしらせはや　元頼
88 まつくれもはや明はなれゆく　玄純
89 弥生とて声をおしむか郭公　兼与
90 ふる雨かすむ杉むらのかけ　玄信
91 逢坂や関路しつかに春のきて　松恵
92 あらしのをともかきりあるらし　似春
93 はるかなる舟出の日えり折にふれ　定治
94 なかれもふかくなるみなと川　立徳
95 初雪のかさなりつるはほともなし　氏伴
96 さそはれて行狩人の袖　兼益
97 むらは又つゝくすそ野の朝朗　兼与
98 煙たなひき軒そならへる　元頼
99 花さけはこゝにかしこにまとゐして　綱元
100 かはすにあかぬ春のさかつき　玄信

忠宗一句　松恵　八
政宗一句　似春　七
元頼　八　景軌　七

兼与　十一　　氏伴　六
玄信　九　　玄純　六
綱元　九　　元勝　一
立徳　九
定治　九
兼益　八」

寛永弐年三月廿六日

千句

何路　追加

1　咲藤のかけ猶にほふ春日哉　　似春
2　霞のうへに松たてる山　　景軌
3　つくりなす池のめくりの雪解て　　氏伴
4　水長閑なる千町田の原　　露松
5　一方にかへりのこれる雁のこゑ　　亀千代
6　くれても月に鶴はふくなり　　小梅
7　露やたゝ真砂の末にむすふらん　　千歳
8　すゝしかりけり秋のむら雨　　福松」

〈付記〉
本稿は平成二七年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金課題番号：15K02257）の研究成果の一部をまとめたものである。また、『寛永花壇千句』の調査では柿衞文庫の御協力を得、翻刻の許可を頂いた。心より感謝申し上げる。

（まつもと　あさこ／日本文学）